

地域と学校 その2

100年前の石榑と学校

小松 尚 (名古屋大学大学院環境学研究所准教授)

いしくれ  
石榑小学校はこの6月から、学校運営協議会を中心とした地域との協働による学校運営を始めました。「石榑の里共育委員会」と名付けられた協議会は6月18日夜に最初の会合を行い、学校の運営方針や今秋の創立100周年記念事業に向けての進捗状況を確認し、これからの石榑小学校の運営について語りあいました。100周年を迎えるこの年に地域と学校がともに新たな体制で歩み始めた感慨とともに、100年という時間のもつ重みを感じる会合でした。

そこで今回は、100年前に遡って石榑小学校の始まりを紹介します。

小学校令制定と地域の再編

明治5(1872)年に学制が頒布され、小学校は修業期間4年の尋常小学校と4年の高等小学校と定められました。石榑のある旧大安町(現いなべ市)では明治8年頃から学校設立の動きが始まりましたが、各々の学校は自前の校舎を建てることはできず、民家やお寺を借りて授業を行っていました。特にお寺は全国くまなく存在し、江戸時代から地域の統合する役割や拠点であったことから、各地で活用されました。

明治18(1885)年には初代内閣(首相は伊藤博文)が発足し、その翌年に森有礼が小学校令を制定しました。この小学校令第8条において、小学校の経費は授業料と寄附金により賄い、不足する場合には町村が補助することができるとしていました。補助を「しなくてはならない」ではなく「することができる」です。地域に学校をつくらせたと言っていいでしょう。時代の違いを感じます。

また、当時の村単位では学校を建設、維持することは困難だったので、明治期の町村合併を契機に学校を建設するというケースも多かったと言われます。石榑もそうでした。教育体制の整備とともに地域が再編されたとも言えるでしょう。その一方で、自由民権運動のうねりの中で学校がその集会場となった頃から、学校の目的外使用は禁止されるようになります(明治33年小学校令第18条)。これを地域と学校の断絶の契機と見る人もいます。



大正3年頃の木造校舎 (石榑小学校提供)

高い志で奔走。村民主導の学校づくり

さて、石榑小学校の歴史は明治40(1907)年7月31日に始まりました。明治39年の南石加村と北石加村の合併による石榑村誕生に続き、それまでの南石加と北石加の2つの尋常小学校を統合し、石榑尋常高等小学校として創立されました。尋常高等小学校とあるのは、4年間の尋常小学校と2年間の高等小学校からなるためです。義務教育が4年から6年に延長されるのは明治41年ですので、それに先んじて高等科を併設したというわけです。

このように学校は開校しましたが、校舎はどうしたのでしょうか？

7月31日の開校日にはまだ校舎はなく、南石加と北石加の旧校舎を使って子どもたちは勉強をしていましたが、8月1日から現在地で校舎の建設工事が始まりました。12月に最初の校舎一棟が完成し、3年生以上が学び始めました。昭和32(1957)年の石榑小学校創立50周年記念冊子『石榑校の五十年』によると、この新築にかかった経費は5,500円でしたが、このうち村が出した公金はいくらだったと思いますか？ 答えは1,100円です。明治40年6月の初めての議会選挙を経て同月に村議会が招集され、そこで決まったのです。

では、残り4,400円はどうしたのか？ 全て村民の寄附でした。その多くは各大字が共有する山林から出る紫石の売り上げ代金3,800円や自主的な寄附金でした。またこの校舎も修業期にある全ての子どもを収容できなかった



昭和30年頃の木造校舎の配置。中央が講堂 (石榑小学校提供)



昭和16年頃に学校で行われた戦没者の村葬 (石榑小学校提供)

ため、その後全ての子どもたちを新築校舎で学ばせようという決定をします。その時も、もし経費が不足すれば村の人々が寄附をしようと決めました。

校舎建設に必要な材料(木材)は村の学務委員や村議員が村内の個人林を踏査して依頼をしました。明治41年1月の雪が膝まで積もる時期に伐採を行い、職人だけでなく村人が寄附人夫として搬出作業にあたりました。校舎の基礎となる礎石は、村の有力者らが、石工を率いて切り出しや運搬の指揮をしました。また校舎敷地は元々畑地でしたので、固く埋め立てる必要があるので、地域の青年が毎晩地固めをしました。さらに、学校の先生も日々の授業の合間に校庭で湯を沸かし、お茶を振る舞ったそうです。

こうして、敷地面積1,368坪、校舎建坪407坪の木造校舎が完成しました。総工費は9,376円(敷地購入費742円含む)でしたが、これに充当された村費は3,243円で、残りの6,133円は寄付金でした。またこれ以外に寄附人夫が5,760人ありました。約3分の2が寄附金という事実を前にすると、賞賛と敬意の念とともに、村民の学校や教育に対する思いはどれほどのものだったのか、今の私たちでは到底想像できるものではないという気持ちにもなります。

松本にある擬洋風学校建築で有名な開智学校(明治9(1876)年完成。国重要文化財)でも、工事費の7割が松本町民による寄付、残りはそれまで校舎として使用したお寺を取り壊した後の古材の売払金などでした。石榑だけでなく、日本各地で志ある人々が学校創設や校舎建設に奔走していたのです。

地域のハレの場、ケの場として歴史を刻む

さらに『石榑校の五十年』を読み進めると、明治42年4月17日と18日の両日に村を挙げて行われた盛大な新築落成祝賀行事の様子が伝わってきます。学校の企画として子どもたちが理科実験などを行い、普段の授業の様子を紹介しましたが、観覧者は引きも切らず、入場制限をしたほどでした。17日には花角力(はずもう)が行われ、翌日には学校から4町(約440m)離れた特設会場で競馬が行われ、豊富な景品を前に大変盛り上がりしました。競



旧講堂前の門(現在) 今も二宮金次郎像(中央)が子どもたちを迎えています

馬は今でも毎春行われており、今年は5月13日(日)に両が池横の競馬場で「大安草競馬」が行われました。かつては農耕馬が走りましたが、今では現役を終えた競走馬が競い合います。

落成式では酒や食事が振る舞われ、「酔歩漫策」の様子になったと記されています。学校がハレの場になったのです。学校でお酒を飲むなんて現代では考えられません。石榑の現在の新校舎の建設委員会で、「いずれ学校で飲めるといいね!」という意見が出ましたが、まだ実現には至っていません。

その後石榑小学校は明治45(1912)年と大正13(1924)年に児童数増加のため校舎増築を行い、昭和12(1937)年には講堂が新築されました。講堂建設には19,253円かかりましたが、この時もその7分の1相当の3,160円は寄附金や物品寄附で賄われました。その中には二宮金次郎の銅像が含まれています。二宮翁はかつての正門の横で、今も子どもたちを出迎えています。

一方、太平洋戦争の時代になると、学校は弔いの場にもなりました。戦地でなくなった若者の村葬が行われ、戦後には石榑の戦没者の慰霊集が編纂されました。石榑小学校では今も平和教育を行っており、一昨年の運動会では5・6年生が「戦後60年 平和への願い」という演技でその成果を発表しました。

石榑だけでなく、どの学校もかつては「地域の学校」だったのででしょう。学校に対する思いや志はどのように今日まで受け継がれ、もしくは変容していくのか。100年前の石榑小学校創設の様子を知ると、考えさせられます。

さて、一気に時代は下って…昭和40年代後半には木造校舎も築後65年を過ぎて老朽化が進んできました。高度経済成長期の中、学校や父兄の間に建て替えの気運が高まってきました。

<参考文献>

大安町教育委員会編『大安町史(第一巻)』昭和61年3月  
石榑小学校学窓会『石榑小学校五十周年記念 石榑校の五十年』昭和32年